

「背の明いた服」について

天 沼 寧

昭和二十二年に国語審議会の答申を受け、翌、二十三年、内閣告示をもって制定された「当用漢字音訓表」は、「当用漢字表制定の趣旨を徹底させるためには、さらに漢字の音訓を整理する必要がある。」として定められたものである。この音訓表に掲げてある音訓は、今後使用する音訓であり、字音は現代の社会に広く使われているものの中から採用し、字訓は、やはり現代の社会にひろく行われているものの中から採用したが、異字同訓はつとめて整理したものである。（同表の「まえがき」による。）

各字の字音・字訓の整理・採否について、国語審議会は、

・・・一つの漢字にいろいろの音があり、またさまざまの訓があることは、漢字をどう使い分けるかを考える上からも、むずかしいことになってまいります。一字多用は便利なようではありますが、実際において不利であります。一語多字はことばの分化が伴わぬがゆえに不合理であります。漢字の国字としての使用を一般的のものとして、国民をしてらくに漢字を読ませ書かせるようにしようとするならば、今まで

のように漢字の音訓を野放しのままにしておいてはならないのであります。漢字の音訓の整理は、この意味において重要性をもつのでありますが、これはまたある程度において、従来の書記習慣をかえることにもなりますから、そこに少なからぬ困難が感じられます。

しかしながら、これをおしきらなければ漢字の運用の合理化は望まれません。

〔以上、昭和二二、九、二九に開かれた国語審議会総会に対して述べた「当用漢字音訓整理に関する主査委員会」委員長の報告による。〕

と考へ、音訓の整理に関して、これまでに「漢字は音用のものだけを認める」という説もあるが、実施は難しいであらうといい、「一音一訓ぐらゐに制限したらどうか」という説もあるが、「これもあまりに公式的のもののように思われる」といい、漢字のうちには「一音一訓ぐらゐですむものが相当にあります、それらはだいたい整理を要しないもので、整理を要するようなのは、

そう簡単にはかたづきません」と言っている。

ところで、同日発表の「文部当局談」では、

音訓の整理にあたっては一つの漢字には、一音一訓（あるいはそのいずれか一つ）を採用することが理想的なのであります。が、われわれの現実の言語生活を考えると、この方針を堅持することは、なかなかむずかしいのでありまして、どうしてもそこには、ある程度のゆとりを認めて、あるものは二音三音、あるものは三訓四訓を認めざるを得ないのであります。

とある。

このような考えに立つて作成され、昭和二十三年二月十六日に内閣告示となった、「当用漢字音訓表」には、「あく」の訓を掲げてある字は一字もなく、「あける」は「明」一字だけであった。そこで、音訓表に従って書く場合には、

明け方	明け暮れ	明けて	夜明け
夜を明かす	明けまして……	明け渡し	明け払う

などの場合は漢字が使えるが、

窓をあける	席があく	穴があく	時間があく
-------	------	------	-------

あいた口がふさがらない

などの場合は、多少違和感があっても、「明」を使って書くか、それが望ましくなければ、仮名書きをすることになっていた。

制定後、約四分の一世紀を経て、この音訓表が改定され、名称は同じであるが、新しく「当用漢字音訓表」として、昭和四十八年六月十八日に内閣告示となり、同時に旧音訓表は廃止となっ

た。新音訓表でも、音訓選定の方針としては、「異字同訓はなるべく避ける。しかし漢字の使い分けのできるもの、及び漢字で書く習慣の強いものは取り上げる。」とした結果、旧音訓表に比べて数多くの異字同訓が掲げられることになった。

旧音訓表では「明」一字だけに掲げてあった「あける」は、新音訓表では、「開・空・明」の三字に掲げられている。

注・旧音訓表には、「明 メイ・ミョウ あきらか・あける・あかるい」とある。その「使用上の注意事項」に、「自動詞にも他動詞にも使われるものについては、おおむねその一方の形のみを掲げてあるが、両様に使ってさしつかえない。」とある。したがって、「明」は「明く」とも使える。

新音訓表には、

「開 <small>カイ</small> ひらく・ひらける・あく・あける	空 <small>クウ</small> そら・あく・あける から	明 <small>メイ・ミョウ</small> あかり・あかるい・あかるむ・あからむ・あきらか・あける・あく・あくる・あかす」
--------------------------------------	----------------------------------	---

とある。その「表の見方及び使い方」に、「語根を同じくし、何らかの派生対応の関係のあるものは、同じ漢字を使用する習慣のあるものに限る、適宜音訓欄又は例欄に主なものを示した。」とある。（新音訓表の原文は横組み。）

国語審議会は、新音訓表の審議にあたって、異字同訓の問題を処理するために、部会資料として『異字同訓』の漢字の用法を作成した。これには、

1 この表は、同音で意味の近い語が、漢字で書かれる場合、その慣用上の使い分けの大体を、用例で示したものである。

2 その意味を表すのに、二つ以上の漢字のどちらを使うかが一定せず、どちらを用いてもよい場合がある。又、一方の漢字が広く一般的に用いられるのに対して、他方の漢字はある限られた範囲にしか使われないものもある。

3 その意味を表すのに、適切な漢字のない場合、又は漢字で書くことが適切でない場合がある。このときは、当然仮名で書くことになる。

とあり、多くの異字同訓の漢字の使い分けの具体例を用例で掲げているが、その一つに、

あく・あける

明く・明ける——背の明いた服。夜が開ける。

空く・空ける——席が空く。空き箱。家を空ける。時間を空ける。

開く・開ける——幕が開く。開いた口がふさがらない。

店を開ける。窓を開ける。

とある。〔原文は横組み。〕

ところで、この最初の用例である「背の明いた服」というのが、どうも気になる。このような「あく」に対して、「明く」を用いたのは、明治のころはともかくとして、現在の慣用として、ほぼ定着しているとみてよいのであろうか。

「背の明いた服」というのは、主として女性向きの、背中の上の部分が、大きくくつてある洋服（背後の襟ぐりが大きい服）、すなわち、その部分の肌が見えるようにした服ということであろう。このほかに、ブラウス・セーター・スカートなどでは、頭からかぶって着るもの、腰回りにゴムを入れて伸縮するようにしたもの以外は、着脱するときに便利なように、容易にできるように、胸側（前）、背側（後ろ）、左側（わき・横）の全部、又は、一部を縦に切り、そこに付けてあるボタン・ひも・ファスナーなどで両側をつないで一体化するようになっていて、この部分を「前あき・背あき（後ろあき）・わきあき（横あき）」などといっているようである。

「背の明いた服」という場合の「あく」と、「前あき・後ろあき」などという場合の「あく」は、根本的には、同じ意味であると思われる。そこで、まず、「後ろあき・背あき・前あき」の三語の「……あき」の漢字表記がどのようになっているか、『和英語林集成（第三版）』を含めて、新旧四十種の国語辞典について当たってみた結果は、次ページに掲げたとおりである。

この三語の全部、又は、一部を見出し語として採録している辞典は少なく、四十種中六種である。その版の初版の刊行年の古い順に掲げる。刊行年を二行にして掲げたものは、右側は、その版の初版の刊行年を、左側は、参照した版の刊行年を示すものである。辞典名の上に付した番号は、十六ページから十七ページにかけて掲げる第1表（四十種の辞典についてのまとめ）における番号である。

26 三省堂国語辞典 第二版

(昭和 5449 . 111 . 11)

(後ろあき) 見出し語にない。

(背あき) 見出し語にない。

前明き セーター・スカートなどの、前があいて、ポタンなどでとめるようになっていて・ところ(もの)。

「ズボンの——スカート」

29 日本国語大辞典(縮刷版) 第九巻

(昭和 6156 . 82 . 1025)

(後ろあき) 見出し語にない。

(背あき) 見出し語にない。

前開 衣服の前面にあきがあること。また、その部分。

32 国語大辞典

(昭和 5756 . 212 . 1010)

後明きせあき(背明)

背明 衣服の脱ぎ着に必要なあきのうちで、背にあるもの。多く背の中央につくる。うしろあき。

前開 衣服の前面にあきがあること。また、その部分。

35 三省堂国語辞典 第三版

(昭和 57 . 2 . 1)

(後ろあき) 見出し語にない。

(背あき) 見出し語にない。

前明き セーター・スカートなどの、前があいて、ポタンなどでとめるようになっていて・ところ(もの)。

「ズボンの——スカート」(↑↓) 後ろ明き。

背明き)

37 現代国語例解辞典

(昭和 60 . 12 . 1)

(後ろあき) 見出し語にない。

(背あき) 見出し語にない。

前開き 衣服の前面があいていること。「前あきのスカ——」

40 言 泉

(昭和 71 . 12 . 20)

後ろ明きせあき(背明)

背明き 衣服の脱ぎ着に必要なあきが背にあること。うしろあき。

前開き 衣服の全面にあきがあること。また、その部分。

以上の六種である。これによると、「まえあき」を見出しとして採録した最初の辞典は、『三省堂国語辞典(第二版)』である。その刊行年は昭和四十九年一月一日である。すなわち、国語審議会の『異字同訓』の漢字の用法が公表されてから、約一年半を経た時である。この第二版には、「うしろあき」、「せあき」は採録されていない。同辞典の第三版でも「うしろあき」、「せあき」を見出し語としてはないが、「まえあき」の項に「反対語は」を意味する「↑↓」を付して、「後ろ明き」、「背明き」と掲げている。さらに、第二版・第三版ともに、「あく(明く)」の項に、第三義として、△背の明いたし「せなかのはだを広く出した」服△

とある。(なお、この辞典の第一版に相当する版には、「まえあき」の見出し語はなく、「あき」の項にも、上記の記述は見られない。)

『日本国語大辞典』、『現代国語例解辞典』でも、「うしろあき・せあき」は、見出し語としては採録していない。「まえあき」における漢字表記は「前開(き)」である。なお、『現代国語例解辞典』は、この項の用例では、「前あきのスカート」と仮名書きをしている。次に、『国語大辞典』、『言泉』では、「うしろあき」・「せあき」・「まえあき」の三語を、参照項目(空見出し)の取り扱いも含めて立項しているが、その漢字表記についてみると、「うしろあき」と「せあき」とは、「後(ろ)明き」・「背明(き)」と、「明」をあててあるが、「まえあき」は、『日本国語大辞典』と同じく「前開(き)」である。(なお、三省堂発行の二種以外の四種の辞典の発行所は、すべて小学館であり、また、『日本国語大辞典』を除く三種の編集者は同じであり、いずれも『日本国語大辞典』とのつながりをもっている。)

次に「あく・あける」を含む複合語のうちから、その「あく・あける」の意味が、なるべく「うしろあき」や「まえあき」などにおける「あき」の意味と同義・類義、ないし、近似していると思われる。

あきかた	あけかた	あけしめ
あけたて	あけっぱなし(あけっぱなす)	
あけっぱらう(あけっぱらう)	あけはなし(あけはなす)	
あけはなし(あけはなす)	あけはらう	

あけひろげ(あけひろげる) あなあき(あなあけ)

の十一語について、「あける」の部分にどの漢字をあてているかを同じ四十種の辞典について調べてみた。すなわち、四十種の中には前述の六種を含んでいる。その結果、「あけたて」、「あけはなし(あけはなす)」、「あけはらう」の三語以外は、採録している辞典が少ないので、第1表では取り扱わないこととした。そのかわりというわけではないが、衣類関係の語「わきあけ(脇あけ)」を含めてある。この語は、表で明らかのように、多くの辞典で立項しているので、「うしろあき」などと別にして、ここで取り扱うことにしたのである。

第1表において、『和英語林集成(第三版)』を除く三十九種の辞典の原文はすべて縦組みである。『和英語林集成(第三版)』というのは便宜上の呼び名で、その扉には『改正 和英 語林集成』とある。表の作成に当たっては、昭和四十九年、講談社刊の復刻版を用いた。また、大辞典は、昭和四十九年、平凡社刊の復刻版を用いた。配列は、おおむね、それぞれの版の初版(初刷)の刊行年の古い順とした。表中の辞典名の右側に記したのがその刊行年である。月・日は省略した。また、実際に調べた辞典は、必ずしも初版(初刷)とは限らない。番号を○で囲んだ辞典は、内閣告示による国語施策を採り入れ、反映させている辞典であることを示す。

すなわち、見出し語の表記に「現代かなづかい(昭和二二)」を用い、その語を書き表す漢字については、刊行年によって、(当用漢字表(昭和二二))以外の漢字、「常用漢字表(昭和五

第 1 表

番号	辞典名 刊行年	{M…明治 T…大正 S…昭和	あけたて	あけはなし (あけはなす)	あけはらう	わきあけ
1	和英語林集成(第三版)	M19	開 閉	明 離	/	脇 明
2	言 海 (第一冊)	M22	(仮名書き)	明 放	/	腋 明
3	日本大辞書	M26	開 閉	明放 = (開放) ^{*1}	明 払 ふ	腋 明 け
4	日本大辞林	M27	開 閉	/	/	開 腋 ^{*2}
5	帝国大辞典	M29	開 閉	明放・開放 ^{*3}	明 払	腋 明
6	日本新辞林	M30	開 閉	明放 ▽開放	明 払	腋 明
7	ことばの泉	M31	開 閉	開 放	明 払	脇 明 ^{*4}
8	辞 林 (増補再版)	M42	開 放	開閉 ▽明放 ^{*3}	明 払	腋 明
9	辞 林 (改訂版)	M44	開 閉	明放 ▽開放 ^{*3}	明 払	腋 明
10	広辞林	T 14	開 閉	明放・開放	明 払	脇明・腋明
11	改修 言泉	S 3	開 閉	開放・明放	明 払	脇 明
12	広辞林 (新訂版)	S 9	開 閉	明放・開放	明 払 ふ	脇明・腋明
13	辞 苑	S 10	開 閉	明放・開放	明 払	脇明・腋明
14	大辞典	S 10	開 閉	開放す・ 明放す	明 払 ふ	脇 明
15	言 苑	S 13	開 閉	明放・開放	明 払 ふ	腋 明
16	修訂 大日本国語辞典	S 14	開 閉	開放・明放	明 払	腋 明 ^{*5}
17	明解 国語辞典	S 18	開 閉	開放す	明 払 ふ	脇明・腋明
18	辞 海	S 27	開 閉	明放・開放	明 払	脇明・腋明
19	広辞苑	S 30	開 閉	明放す・ 開放す	明 払 う	脇明・腋明
20	例解国語辞典	S 31	開け立て	明け放し・ 開け放し	明け払う・ 開け払う	/
㉑	新版 広辞林	S 33	開 閉	明け放し・ ^{*6} 明け放し	明け払う ^{*6}	脇明(け)・ 腋明(け)
㉒	三省堂国語辞典	S 35	開け閉て	明け放す・ 開け放す	明け払う	/
㉓	三省堂新国語中辞典	S 42	開 閉	明け放し・ ^{*6} 開け放し	明け払う ^{*6}	脇明け・ 腋明け
24	広辞苑 (第二版)	S 44	開 閉	開放・明放	明け払ふ・ 開け払ふ	脇明・腋明
㉔	広辞林 (第五版)	S 48	開 閉	明け放し・ ^{*6} 開け放し	明け払う ^{*6}	脇明け・ 腋明け
㉕	三省堂国語辞典(第二版)	S 49	開け閉て	開け放す	開け払う	/
㉖	改訂 新潮国語辞典	S 49	開(け)閉(て)	開(け)放す	明(け)払う	脇明(け)・ 腋明(け)

㉔	学研国語大辞典	S 53	開け閉て	明け放し・ 開け放し	明け払う・ 開け払う	脇明け・ 腋明け
29	日本国語大辞典(縮刷版)	S 54	開 閉	開 放 *7	明 払	脇明・腋明
㉔	角川新国語辞典	S 56	開けたて	開け放す	明け払う	わき明け
㉔	新明解国語辞典(第三版)	S 56	開(け)閉て	開(け)放す *3 ▽明放す	開(け)払う *3 ▽明払う	一明け 〔「脇」の用例 として〕
㉔	国語大辞典	S 56	開 閉	開け放す	明け払う	脇明・腋明
㉔	講談社国語辞典(新版)	S 56	開けたて	開(け)放し	/	脇明け *8
㉔	新選国語辞典(ワイド版)	S 57	開けたて	開け放す	開け放う	わき明け
㉔	三省堂国語辞典(第三版)	S 57	開け閉て	開け放す	開け払う	/
36	広辞苑(第三版)	S 58	開 閉	明放・開放	明け払う・ 開け払う	脇明・腋明
㉔	現代国語例解辞典	S 60	開け閉て	開け放す *9 (明け放す)	開け払う・ 明け払う	/
㉔	新潮現代国語辞典	S 60	開(け)閉て	開(け)放す・ 明(け)放す	開(け)払う・ 明(け)払う	/
㉔	岩波国語辞典(第四版)	S 61	開け閉て	明け放す・ 開け放す	明け払う・ 開け払う	/
㉔	言 泉	S 61	開け閉て	開(け)放し	明(け)払う	脇明け・ 腋明け

*1 見出しに「あけはなし」とある。動詞形は「あけばなす」。

*2 古語としての意だけ。

*3 語釈のあとに別表記として掲げてある。

*4 見出しを「わきあき」としている。別項に「わきあけ の ころも」がある。

*5 別項の「わきあけ こそで」は、「脇明……」とし、「わきあけ の ころも」は、「腋明け……」としている。

*6 「明」の字には、表内音訓であるが、仮名書きが望ましいという記号を付けてある。

*7 引用の用例は、すべて「明……」である。

*8 語釈のあとに、「わきあき」の語形を掲げてある。

*9 () 内は、標準表記に対する慣用表記を示す。

六) 以外の漢字であることを示す記号をつけている。「例えば、「わきあけ(脇明け)」の「脇」の字。また、漢字の読み(音訓)については、「当用漢字音訓表(昭和二三)」、当用漢字音訓表(昭和四八)」、及び、「常用漢字表」の音訓欄に掲げてない音訓であることを示す記号をつけている。「例えば、「あけたて(開け閉て)」の「閉」の字の読み。次に、送り仮名については、「送り仮名のつけ方(昭和三四)」、「送り仮名の付け方(昭和四八)」を適用した送り仮名によっており、後者については、その本則・例外、通則・、及び、付表の語(一のなお書を除く。)によるほか、許容の形を掲げてあるものも多い。その他、辞典によっては、より細かな表記上の情報を盛り込んでいるものもある。第1表の作成に当たっては、以上のような記号はすべて省略し、また、漢字の字体は、すべて現行通用のものを用い、送り仮名は、原文どおりにしてある。

以下、第1表について、結果をまとめてみると、次のとおりである。なお、ここでは、表外字・表外音訓・送り仮名は一切問題としない。

○「あけたて」について (四十種)

立項している辞典40種のうち、前部分の「あける」に対して、

- ・「開」を当てているもの……………39種(97・5%)
- ・仮名書きのもの……………1種(2・5%)
- 「あけはなし(あけはなす)」について (三十九種)

両者を見出し語としている辞典では、適宜、その一方だけを掲げてある。「あける」の部分に当ててある漢字が二つある場合、その順序は、それぞれの辞典のとおりである。

・「明」だけを当て、「開」には全く解れていないもの

……………2種(5・13%)

・「明」だけであるが、語釈のあとに「開」の語形を掲げているもの。……………3種(7・69%)

・「開」だけで、「明」には全く触れていないもの。

……………11種(28・2%)

・「明」・「開」の順で両者を掲げているもの。

……………15種(38・46%)

・「開」・「明」の順で両者を掲げているもの。

……………8種(20・51%)

○「あけはらう」について (三十六種)

・「明」だけを当て、「開」には全く触れていないもの。

……………25種(69・44%)

・「開」だけをあて、「明」には全く触れていないもの。

……………3種(8・33%)

・「開」だけであるが、語釈のあとに「明」の語形を掲げているもの。……………1種(2・78%)

・「明」・「開」の順序で、両者を掲げているもの。

……………5種(13・89%)

・「開」・「明」の順序で、両者を掲げているもの。

……………2種(5・56%)

「わきあけ」については後述する。

「あけたて」とは、戸障子など、空間を物理的に遮る物をひらいたり、とじたりすること（取り払ったり、設けたりすること）である。この場合の「あける」には、仮名書きの一種を除いて、すべて「開」を当てている。

あけはなし（あけはなす）とは、同じく、戸・障子などをすっかりひらく（取り払う）ことである。

「あけはらう」とは、①戸障子などをすっかりひらく（取り払う）という意と、②家・部屋などに置いてあるものをきれいに取り除き、始末をして、立ち退くという意がある。今、この論では、②の場合は問題外である。

すなわち、「あけたて」「あけはなし」「あけはらう」の三語における「あける」の意味は、いずれも、戸・扉・窓・障子・ふすま・シャッターなど空間を物理的に遮っている物を取り払うという意である。「あけたて」の場合は、すべて「開」だけを当てているのに対し、「あけはなし」の場合は、「開」だけのものは、一種（二八・二％）と少なく、順序はともかくとして、「開・明」の両者をあてているものは、二十三種（五八・九七％）と半数を超えている。次に、「あけはらう」になると、②の意味の場合の影響によるものか、「明」だけのものが、二十五種（六九・四四％）と半数をはるかに超え、「開」だけをあてているものは、わずか三種（八・三三％）にすぎない。（「あけはらう」の②の意と類似の語に「あけわたす」がある。これは「明け渡す」とするの

が慣用で、「開け渡す」とは書くことないと思われる。）

なお、「あけはなし」の場合は、明治の中ごろから、両者を併記するものがあるのに対し、「あけはらう」の場合は、昭和三十年ごろまでのものは、すべて「明」だけであったのが、三十一年ごろに「明・開」を併記するものがあらわれ、その後も、傾向としては、「明」だけのものが多い。が、昭和四十九年ごろから、「開」だけのものや、併記するにしても、「開・明」の順にしたものが散見するようになってきた。これは、前述の国語審議会の「異字同訓」の漢字の用法の公表後、改訂、又は、新たに刊行した辞典に多い。

以上のように、「あけたて」の「あける」の場合に、「明」を当てている辞典は一種もないのであるが、戦前の文学作品には、次に幾つか実例を挙げるように、戸・障子を「あける」の場合に「明」を用いているものが数多く見られる。以下の実例には、戸・窓・障子など以外のもので、現在では、「開」を用いるのが慣用となっているものも含めてある。なお、わき線は、引用者による。

- ① 彼は凍れる窓を明け、乱れた髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。〔森鷗外「舞姫」〕
- ② 内には言ひ争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。〔森鷗外「舞姫」〕
- ③ その窓の障子が一尺ばかり明いていて、卯の殻を伏せた万年青の鉢が見えている。〔森鷗外「雁」〕
- ④ 十銭銀貨を紙に包んで、梅に持たせて出すと紙を明けて見

て、「森鷗外」「雁」

- ⑤ ……、小をんなが持て来る一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みたるを……「森鷗外」「舞姫」

- ⑥ もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスツと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。「夏目漱石」「吾輩は猫である」

- ⑦ そつと明いた戸はそつと締る。「夏目漱石」「虞美人草」

- ⑧ やがて静かなうちで、すうと唐紙が明く音がする。「夏目漱石」「虞美人草」

- ⑨ 其所の窓を潔きよく明け放した彼は、東向に直立して・

・「夏目漱石」「彼岸過迄」

- ⑩ その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支えるからな「夏目漱石」「坊ちゃん」

- ⑪ わたしは雛と一しよにいるのも、今日が最後だと考えると、殆ど矢も楯もたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。「芥川龍之介」「雛」

森鷗外・夏目漱石の作品から、それぞれ五例、芥川龍之介から一例を挙げた。鷗外・漱石には、これ以外にも多くの用例があるが、必ずしもすべて「明」を用いているわけではなく、同じ物の「あく・あける」に、「開」も、仮名書きも多く用いている。龍之介は「明」を用いているのは、⑪の例しか見当らず、他は、「開」か、仮名書きである。なお、衣類に関する「あく・あける」の用

例は見当たらなかった。「以上の二例は、すべて、近代作家用語研究会・教育技術研究所編、教育社刊の『作家用語索引』の『森鷗外』、『夏目漱石』、『芥川龍之介』によった。（原文は、横組み。）しかし、「あけたて」の場合は、『作家別用語索引』によれば、夏目漱石の作品に三例あるが、いずれも「開閉」である。また、各種節用集でも、「あけたて」を、「開閉（開閉・開闔）」としており、「明」を当てた例は見付からなかった。

次に、教科書では、明治四十三年度から使用の、いわゆる第二期の国定教科書に、

- ⑫ 熊ハイタツラモノデ、人ノ家ノクラノ戸ヲ明ケテ、カズノ子ノ俵ヲカツイデニゲテ行クコトガアルトイヒマス。

〔巻六・第十九〕

- ⑬ 葉の散果てた冬木立に吹きすさむ木枯の風は、音を聞くだけでも物すごい。兩戸を明けて見ると、明るい月夜である、……〔巻九第・二十課〕

とある。

〔以上の二例は、国立国語研究所編、三省堂刊の『国定読本用語総覧 2』によって検索し、本文は、古田東朔編、『小学読本便覧 第六巻』によった。ただし、わき線は、引用者が施した。〕

以上の「あく・あける」は、『異字同訓』の漢字の用法に従えば、「開」「空」を使うのが適当であり、また、それが、現在の慣用にも合っていると思われる。なお、教科書でも、衣類に関する「あく・あける」の用例は見当たらなかった。

次に「わきあけ」についていうと、この語は、第1表で示したように、明治十九年刊の『和英語林集成 第三版』以降、今日に至るまでのほとんどの辞典で採録しているが、昭和三十年代からの、いわゆる小型辞典には採録していないものもある。それだけ、日常生活に縁遠い語になったということができであろう。

「わきあけ」とは『広辞苑 第三版』によれば、

①袖から下の両わきをすべて開(か)いて縫わずに仕立てた、襦(ろ)のない袍(ほう)。わきあけのころも。開腋(けつてき)〔用例省略〕②幼児または婦人の衣服の袖のわきを縫わないところ。

ということ、②の意味のあとに、へ左右各四つあるので「やつくち」ともいう。などと説明している辞典も多い。

「わきあけ」は、『和英語林集成』の初版(慶応三)にも再版(明治五)にも、その漢字表記を「脇明」として採録しており、もっと古く、『日葡辞書』(慶長八(一六〇二))にも、次に掲げるように採録してある。「ただし、岩波版『邦訳 日葡辞書』に於る。」

Vaguenode. フキツケノツナ (腰開けの袖) 下
(Ximo) では Furisode (振袖) と言う。幼児の着物 (Quimons) で、[脇に] 開いた口のある袖。▲Furisode; Vaguenode.

右で明らかなように、邦訳版では、漢字表記を「脇開けの袖」と、「開」を用いてある。

空間を物理的に遮る物の全部、又は、一部を取り払って見える

ようにする意味の「あく・あける」に対して「明」を当てるのが普通であった時代に、「わきあけ」を「脇明(け)」などと書くことは少しも不自然でなかったであろう。そして、「わきあけ」という語は、辞典に採録する語としてふさわしい語として、どの辞典にも採録され、今日に至るまで、その漢字表記を、伝統的に「脇(・腋)明」としていたと思われる。「わきあけ」に「明」を当てるのならば、「うしろあき・せあき・まえあき」の場合も、当然「明」を用いるのが適当と思われるが、前述のように、この三語は、国語審議会の〈異字同訓〉の漢字の用法^①が公表されるまでは、辞典に採録されていなかったので残念ながら不明である。

そして、昭和四十九年刊の辞典に初めて、「まえあき」が「前明き」として採録されたあとに刊行された辞典の何種かに、「まえあき」は、「前開(き)」としてあるが、「うしろあき・せあき」には「明き」としてあるものがある。

次に新聞について、少ないながら実例を挙げてみると、

- ① 前開きのベビー服を／＼ベビー服には、なぜ後ろ開きのものが多いのでしょうか・・・／＼そこで前開きのものを探しますが・・・〔読売新聞—5、52・7・16、投稿〕
- ② ……リゾートやちょっと軽い夏の夜の食事の時になどに着たい、背中を大胆に開けただけのシンプルなワンピースです。〔朝日新聞—13、59・7・25〕
- ③ 胸や背中を大きく開けて〔朝日新聞—17、61・6・10、写

真説明。なお、本文の記事では、「……ウェディングドレスも胸や背中が大きくあくようになったとか。……」と仮名書きにしている。」

注：「」の前は見出し、「」は行かえを示す。わき線は

引用者による。③は、原文では横組み。

のとおりで、「背の明いた服」と同一の用例であるが、すべて「明」ではなく「開」を用いている。

また、ごくわずかであるが、洋裁関係の雑誌などをみると、ほとんどが「・・あき」と仮名書きにしているようである。これまでに述べてきたいろいろの事実、特に、昭和五十五年刊の『邦訳日葡辞書』が、「腋開けの袖」としているところから考えると、「背のあいた服」の場合は、仮名書きか、漢字を用いるとすれば、現代では、「明」よりも「開」のほうが適切だと思うのであるが、いかがであろうか。

〔昭和62年10月6日 稿了〕

新刊紹介

秋永一枝・後藤祥子編

『袖中抄 声点付語彙索引』

(アクセント史資料索引六)

本書は『袖中抄』諸本のうち声点付記善本とされる高松宮本・天理図書館本・京都大学図書館平松本・前田尊経閣本の声点記載部分のすべてを掲出した索引である。

顕昭の『袖中抄』は、該博な彼の歌学を

集大成した著作というのみならず、院政期歌学の軌跡と成果を俯瞰できる大著である。先にわれわれは、橋本不美男・後藤祥子著『袖中抄の校本と研究』(昭和60・2笠間書院)によって、現在望みうる最善のテキストを手にすることができた。本索引は、同書と相俟って、『袖中抄』を読み解くうえで必携の利器といえるだろう。

声点については、国語音韻史研究の資料としては勿論、最近では歌学資料の一環として文学研究の立場からも注目を集めてい

る。本索引が国語学者と文学研究者との共同作業の結果成ったこと自体、現今の研究関心のありようを端的に物語っている。なお、本索引は私家版のため、購入希望のむきは左記宛直接申し込またいよし。

〒162 東京都新宿区戸山一―二四―一

早稲田大学文学部秋永研究室内

アクセント史資料研究会

(昭和62・10 私家版 A5判 一八三頁
三〇〇〇円・送料二五〇円)「兼榮信行」